歴史地震
第37号 (2022) 69 - 73頁
受付日 2021/10/31, 受理日 2022/3/2

［資料］1923 年関東地震による伊豆大島の被害を記した資料

京都大学　大学院理学研究科* 服部　健太郎

Documents describing damage to Izu Oshima by the 1923 Kanto Earthquake

Kentaro HATTORI

Graduate School of Science, Kyoto University,
Kitashirakawa Oiwake-cho, Sakyo-ku,
Kyoto, 606-8502, Japan

The 1923 Kanto earthquake caused damage to persons and buildings in Izu Oshima. There was a discrepancy between the records regarding the extent of the damage. The damages to persons are said to be four dead in Okada village in one record [Matsuzawa (1925)], while the other record says that there are four in Okada village and three in Sashikiji village [the Social Affairs Bureau of Ministry of Home Affairs (1926)]. In order to examine the problem of the discrepancy, I checked three materials in which the damage to Izu Oshima was surveyed immediately after the 1923 Kanto earthquake. The documents are Nakamura (1924) and two reports owned by National Institute for Defense Studies, Japan. All of these documents say that four persons in Okada village in Izu Oshima were killed by landslide, while there were no descriptions of deaths in other areas. The result suggests that three deaths in Sashikiji village reported by the Social Affairs Bureau of Ministry of Home Affairs (1926) need more consideration.
Keywords: the 1923 Kanto Earthquake, Izu Oshima, earthquake damage, Okada village and Sashikiji village.

§1. はじめに

1923 年 9 月 1 日に発生した関東地震（以下，関東地震と呼ぶ）は，伊豆大島（東京都大島町，図 1(a)）にも大きな被害をもたらした．松澤(1925)181−182 頁によると，伊豆大島北部の岡田村（東京都大島町岡田，図 1(b)）において，崖の崩壊のために 4 名が亡くなった（表 1）．この崩壊場所は，井上(2014)により特定されている．また内務省社会局(1926)566−568 頁に

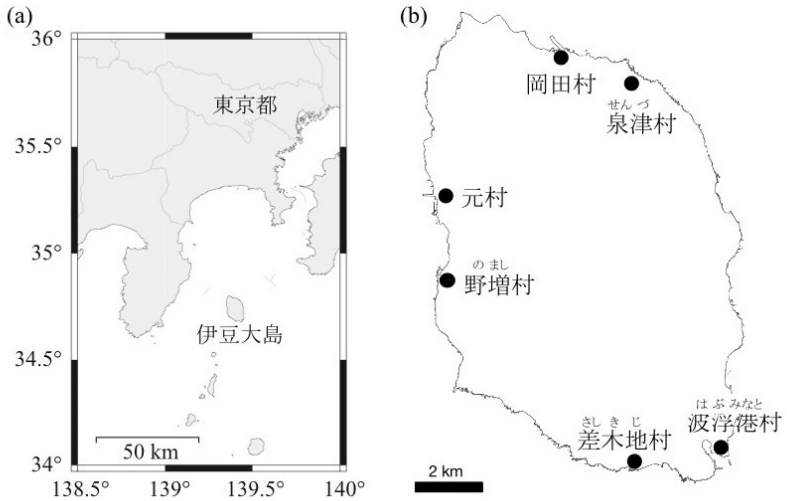

図1 伊豆大島の地図　(a) 伊豆大島の位置　(b) 伊豆大島の村々（当時）
Fig. 1 Map of Izu Oshima　(a) Location of Izu Oshima　(b) Villages at that time in Izu Oshima

* 〒621-0814 京都府亀岡市三宅町 118-7
電子メール: hattori@kueps.kyoto-u.ac.jp

表 1 1923 年関東地震による伊豆大島の被害

Table 1. Damage to Izu Oshima by the 1923 Kanto earthquake

	松澤（1925）						内務省社会局(1926)						
	死者	負傷者	全潰(家数)		半潰(家数)		死者	負傷者	全潰(棟数)		大破損(棟数)		浸水(棟数)
			住家	非住家	住家	非住家			住家	非住家	住家	非住家	住家 非住家
元村					50	4				9			
岡田村	4	2	6	12	4	1	4	2	8	12	10	3	4
野増村			4	6	55	42					19	5	
波浮港村		1						1			3	27	
差木地村							3	4					
合計	4	3	10	18	109	47	7	7	8	21	32	45	4

よると，岡田村にて 4 名，大島南部の差木地村（東京都大島町差木地，図 1(b)）にて 3 名の計 7 名が亡くなっている（表 1）．また岡田村 6 棟及び野増村 4 棟の計 10 棟[松澤(1925)]，あるいは岡田村 8 棟[内務省社会局(1926)]の全潰が，伊豆大島において発生した(表 1)．

松澤(1925)と内務省社会局(1926)の死者数の違い，すなわち内務省社会局（1926)が記した関東地震による差木地村の死亡者 3 名について検討することを本論の目的とし，関東地震の発生直後に行われた伊豆大島の被害調査の資料を検討した．

§2. 伊豆大島における 1923 年関東地震の被害

伊豆大島における関東地震の被害を記した資料を調査する際に，文献目録である Foster(1956)を参照した．Foster(1956)は「西北太平洋諸島に関する地質土壌文献目録」であり，西北太平洋諸島には琉球諸島及び伊豆・小笠原諸島も含まれている[諏訪(1957)]．Foster(1956)485 頁に，後述の中村(1924)がある．また，アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブを閲覧した．東京都公文書館の所蔵資料の調査も行った．なお原文を示す際，原文のふりがなは省略し，旧字体は常用字体に変換した．また句読点の「、」「。」はそれぞれ「，」「．」に直した．解読できない箇所は□（ハコ）で示した．

2.1 中村清二氏による報告

中村(1924)は，当時の科学雑誌『理学界』に掲載された，東京帝国大学教授の中村清二氏による記事である．中村氏は関東地震の発生当時，伊豆大島の元村の仮住まいに滞在していた．その時感じた揺れの描写から，中村(1924)の記述は始まる．その後の様子は次のように記されている．

「それから十数分して村に行つて居た老婆が走り帰つて来て，村では大分瓦が落ち石垣が崩れ，又字コウボウ浜にあつた漁船が津浪に浚はれたと告げた．そこで早速海岸の見える所へ行つて見ると，宇湯の浜に平常ならば決して浪の来ぬ高い所に引上げてある数艘の漁船が今将に浚はれんとして居るし，網小屋は既に覆されて居る程の高浪が襲ひ来た．此浪の来た所は後に陸軍の二万分一の地形図で見ると標高十二三米の地点であるから随分高い浪である．」(中村(1924) 6 頁)

「コウボウ浜」（弘法浜）及び「湯の浜」は，現在の大島町元町（当時の元村）南部の海岸に今も残る地名である．また，「陸軍の二万分一の地形図」は，1889(明治 22)年に発行された『二万分の一地形図新嶋村』と思われる[地図資料編纂会編(2001)171 頁]．岡田村には約 40 尺[水路部(1924)]，約 13 m[内田(1925)]，12 m[羽鳥(1973)]といった高さの津波が襲来したとされていたが，元村にも同程度の高さの津波があったことになる．

その後中村は，元村を巡回して被害状況を調査している．そして，岡田村で村民が4名埋まったとの知らせを受け，岡田村へ向かい，次のように調査した．

「元村内の視察を一通り終つてから元村の村長藤井氏と共に約一里半東北にある隣村岡田村に行つた．之は同村に崖崩れがあつて村民が四人之に埋められたと云ふ飛報があつたからである．元村と岡田村と

の丁度中程の所までは道路の両側が所々崩壊して居たが，真中より先き岡田村に近い方は全く道路の崩壊が無く，又岡田村に到着して見ると人家に全く地震による被害が無い．海岸に行つて見ると此所も丈余の津浪が来たので船が多く浚はれ，又其船が浜に打返されて海岸に近い所にある平家建の家の檐先に船の舳が衝突したのだとて家が破損したのがあつた．然し家は一軒□津浪に取られたのは無い．此所では高浪が二度ばかり襲来したと云ふことであつた．それから人が生埋にせられた崖崩れの所に行つて見ると，之は四五年前には高さ百尺以上もある急勾配の崖を幾分削り取つて新道を作ったことがあつたが，此絶壁が崩壊し家が四軒埋没して居た．此削り取られた所の下に家があつたと云ふ事が誠に不幸であるが，住家としてはあるべからざる位置にあつたのは残念な事である．此所計りではなく此崖続きで海岸を為して居る絶壁はズット東の方の風早岬の灯台から更に東の乳ケ崎の尖端まで崩壊の場所が断続的に並んで居る．」（中村(1924) 6 頁）

なお中村はその日の内に元村に戻り，夜は娘と交代で余震を計測している．この計測結果は，『震災予防調査会報告』の記事[中村（1925)]に示されている．

翌 2 日，中村は伊豆大島南部の野増村に向かい，野増村の被害状況を，次のように調査した．

「野増村に入つて見ると此村の被害は仲々に甚しい．大抵の家は傾くか又は捩れ，屋根瓦は落ちたのが七八分位である．墓地に入つて見ると先づ九分通りは転倒して居るか，或は倒れなくても方向を変じてあらぬ方を向いて居る．」（中村(1924)7-8 頁）

村民に対し地震の講演会を行った後，元村に戻った．4 日午後4時頃には，元村から船に乗り東京湾に向かい浦賀にて仮泊した．そして 5 日午前 8 時に霊岸島に上陸した．上陸後，東京府庁に寄り大島の被害状況を報告した．その後「そこで翌六日に芝浦から出る駆逐艦江風が房総半島・大島・伊豆半島を巡視せられるのに便乗させて貰ひ，一通りの視察を為し九月八日に帰宅した」とある．第 14 駆逐隊に所属していた江風は，関東地震の発生を受けて，呉鎮守府から東京方面に急行した[後藤（1975)]．

2.2 海軍の第 14 駆逐隊による調査

2.1 の最後に述べた，第 14 駆逐隊による調査の結果が，『震災地視察関係』（防衛省防衛研究所)3-4 枚目の「地震報告（第七号）中央気象台」と題する報告の中に示されている．この報告の中に，「伊豆大島及房洲館山視察概況」と題する箇所がある．そのうち伊豆大島の被害に関わる箇所を以下に示した．解読の困難な部分は，『伊豆大島及房洲館山視察概況』（東京都公文書館蔵）2-3 枚目に収録された同種の文書を参考にした．

[史料 1]『震災地視察関係』3-4 枚目
「伊豆大島ハ被害軽微ニシテ僅カニ岡田村ニ於テ山崩ノ為メ住家四牛舎三倒潰シ死者四ヲ出セリ又野増村ニ於テ家屋半壊三牛舎倒潰二アリ．」

また，『震災救護日報（1）』（防衛省防衛研究所）42-54 枚目に， 1923 年 9 月 8 日正午調べの情報のひとつとして，第 14 駆逐隊により報告された「震災救護日報第四（別紙） 伊豆大島．館山．下田方面震災況状 第十四駆逐隊報告」がある．このうち，伊豆大島の各村の被害に関わる記述を以下に示した．

[史料 2]『震災救護日報（1）』47-49 枚目
元村：「死傷者ナク倒壊半壊家屋等ナシ激震時ハ海水一町程減退セリト」

岡田村：「大ナル□々ノ被害ナケレトモ震動ノタメ山地ノ新道崩壊シ之カ為家屋四戸埋没死者四名（女三名幼児一名）牛二頭圧死ヲ遂ケ海嘯ノ為ニ五六隻ノ漁船中三隻ヲ除ク外尽ク流失セリ」

泉津村：「道路若干崩壊シ水道ノ破裂（既ニ修復セリ）シタルノ外格別ノ被害ナク死傷者ナシ」

野増村：「家屋半壊三戸アリタルノミニシテ死傷者ナシ」

差木地村：「被害死傷者ナシ」

波浮港村：「断岸面二ケ所延長二〇間崩壊シタルノ外人畜ニ死傷ナシ」（後略）

史料 1,史料 2 に，岡田村では埋没により死者 4 名が発生したことが書かれている．一方史料 2 によると差木地村については人的被害がないとされている．

2.3 他の報告

他の報告として，『関東戒厳司令部発表（1）』（防衛

省防衛研究所)26 枚目には次のように記されている.

[史料 3]『関東戒厳司令部発表(1)』
「第五十号　九月八日　関東戒厳司令部発表
伊豆大島ノ状況
本八日伊豆大島ヨリ帰還セル歩兵第五十八連隊附将校ノ言ニ依レハ大島ハ九月一日静穏ニシテ東海岸ハ少シク被害アリ又軽度ノ海嘯アリシノミト」

また, 伊豆大島に向かう船の中で関東地震に遭遇し, 地震後の伊豆大島に上陸した人物による記述には, 9 月 2 日に差木地から野増に向かう中で「行くにつれて狭まつた道は, 左右の崖が崩れて椿の樹が根こそぎ倒れて道をふさいで居る」[金原(1924)]とある(108 頁). これは関東地震による伊豆大島の土砂災害を記している可能性がある.

§3. おわりに

岡田村における人的被害について, 中村(1924)・『震災地視察関係』(史料 1)・『震災救護日報(1)』(史料 2)のいずれにも死亡者 4 名の方が記されていた. そして『震災救護日報(1)』には, 差木地村に人的被害がないことも明記されていた. 内務省社会局(1926)が関東地震による死亡者とした差木地村の 3 名について, 今後の検討の余地がある.

謝辞

第 38 回歴史地震研究会にて, 本論の原型となる内容の口頭発表をさせて頂きました. またその際, 座長の小松原琢氏より具体的なコメントを頂きました. アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブにより防衛省防衛研究所の所蔵記録を閲覧しました. 東京都公文書館所蔵記録を本研究に活用しました.図 1(a)の作成に GMT[Wessel and Smith (1991)]を用いました. 図 1(b)の作成に国土地理院白地図を用いました. 編集委員の白石睦弥氏及び匿名の査読者より, 論文の改訂に有益なご助言を頂きました. 記して感謝します.

対象地震:1923 年関東地震

文 献

地図資料編纂会編, 2001, 正式二万分一地形図集成 東日本, 柏書房, 182 pp.

Foster, H. L., 1956, Annotated bibliography of geologic and soils literature of western North Pacific islands, the Intelligence Division, Office of the Engineer Headquarters United States Army Forces Far East and Eighth United States Army (Rear) with personnel of the United States Geological Survey, 884 pp.

後藤新八郎, 1975, 関東大震災における軍の救護活動, 新防衛論集, **3**, 2, 72-86.

羽鳥徳太郎, 1973, 南関東周辺における地震津波, 関東大地震 50 周年論文集, 57-66.

井上公夫, 2014, 伊豆大島・元町の土砂災害史, 地理, **59**, 2, 10-19.

金原三省, 1924, 大島紀行ー震源地附近航行ー, 写真月報, **29**, 102-114.

松澤武雄, 1925, 木造建築物ニ依ル震害分布調査報告, 震災予防調査会報告, 第 100 号(甲), 163-260.

内務省社会局, 1926, 大正震災志 上, 内務省社会局, 1236 pp.

中村清二, 1924, 伊豆大島にての地震, 理學界, **22,** 1, 5-10.

中村清二, 1925, 伊豆大島ニ於ケル余震記録, 震災予防調査会報告, 第 100 号(甲), 311- 312.

水路部, 1924, 大震後相模灘附近水深變化調査圖, 水路要報, 第 3 年第 16 号.

内田虎三郎, 1925, 關東大地震ニ因ル相模灣底及附近地形ノ變化調査報告, 震災予防調査会報告, 第 100 号(乙), 61-62.

諏訪 彰, 西北太平洋諸島に関する地質土壌文献目録, 地学雑誌, 1957, **66,** 3, p. 214.

Wessel, P. and W. H. F. Smith, 1991, Free software helps map and display data, EOS Trans. AGU, 72, 441-446.

史料

『震災地視察関係』:『JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08050967700, 震災地視察関係(防衛省防衛研究所)』

『震災救護日報(1)』:『JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08050980400, 大正12年　公文備考巻160　変災災害(防衛省防衛研究所) 』

『関東戒厳司令部発表（1）』:『JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08050995900，関東戒厳司令部発表（1）（防衛省防衛研究所）』
東京都公文書館蔵『伊豆大島及房洲館山視察概況』（『雑件　冊の7』(請求記号:305.B4.17）綴込番号 018）